



ハーベスト・タイム・ミニストリーズ

クリスチャン・ リーダーシップセミナー

第1回

中川健一「日本人の精神構造を探る（1）」
— 戦国時代の日本と基督教の出会い —



無断複製・転載を禁じます

目次

§1 西欧世界と日本の出会い	1
はじめに	1
Ⅰ. 時代背景	1
1. 宗教改革	1
2. 反宗教改革	2
3. 大航海時代	2
4. 日本は戦国時代	3
§2 フランシスコ・ザビエル	5
Ⅰ. ザビエルの来日	5
1. イエズス会	5
2. ザビエルと日本人の出会い	5
3. ザビエルの日本人評価	6
4. ザビエルが糾弾した日本の三大悪習	7
5. 翻訳上の問題	7
Ⅱ. ザビエルの失望	9
1. 布教許可	9
2. 天皇と将軍	9
§3 ザビエル以降	11
Ⅰ. 布教の進展	11
1. 来日した代表的な宣教師	11
2. イエズス会と軋轢を起こすフランシスコ会の理念	12
3. イエズス会の理念	12
Ⅱ. 宣教師たちが見た日本人	13
1. 高く評価された日本人の知性	13
2. ヴァリニャーノの布教方針	14
3. アコスタの布教住民分類	15
4. 日本および中国における布教状況	16
§4 織田信長と宣教師たち	18
Ⅰ. 都での布教	18
1. 将軍からの布教許可	18
2. 信長の上洛	18
Ⅱ. 日本の権力構造	19

1. 最初の禁教令は天皇から.....	19
2. 戦国時代の天皇.....	19
3. 天皇が最高の権威をもっていた理由.....	20
4. フロイスによる分析.....	21
III. 破壊的改革者織田信長.....	21
1. 信長とフロイスの第1回目の会見.....	21
2. 信長とフロイスの第2回目の会見.....	22
3. 信長とフロイスの第3回目の会見.....	24
4. 信長の本音.....	24
§5 キリスト教と仏教.....	26
I. 討論の伝統.....	26
1. 宗義論争の習慣.....	26
2. 仏僧との交流.....	26
3. 宣教師の伝道法.....	27
4. 高山友照（ダリオ）の回心.....	28
5. 信長の面前での宗論.....	29
6. キリスト教と仏教の相違点.....	29
7. 地動説について.....	30
II. 布教成功の理由.....	31
1. キリスト教の成功.....	31
2. 日本人女性入信の理由.....	32
3. 上流階級と下層階級.....	32
§6 キリスト教と武士道.....	34
I. キリシタン大名.....	34
1. キリシタンの世代.....	34
2. 武士道.....	34
II. 教理内容 「どちりな きりしたん」（キリスト教教義）.....	36
序文.....	36
1. キリシタンといふは何事ぞといふ事.....	37
2. キリシタンのしるしとなる貴きクルスの事.....	38
3. パアテル ノステルの事.....	39
4. アベ マリヤの事.....	39
5. 「どちりな きりしたん」雑感.....	40
第1回セミナーのまとめ.....	40
参考文献.....	41

§1 西欧世界と日本の出会い

はじめに

- (1) なぜ日本では、クリスチャン人口が1パーセント以下なのか。
- (2) 日本人の精神構造を歴史的文脈の中で理解する必要がある。
- (3) その上に、有効な宣教方法を模索する必要がある。
- (4) 「日本人の精神構造を探る」というタイトルで、3回（年）に分けて語る。

I. 時代背景

1. 宗教改革

- (1) カトリック教会（ローマ教会）は、ローマ皇帝コンスタンチヌスがキリスト教を国教と定めた345年以降、西欧世界のなかで一貫して普遍的教会の地位を保ってきた。
 - ①多くの異端や分派が常に現れたが、カトリック教会は宗教会議を開き、正統性を守る努力を続けてきた。
 - ②カトリック教会は、常に唯一最高の立場を守ってきた。
- (2) 1517年10月、マルティン・ルターによる「95ヶ条の提題」の公開。
 - ①これは、ローマ・カトリック教会の信仰改革運動である。
 - ②救いは人間の行いによらず、信仰のみによるという「信仰義認論」を唱えた。
 - ③さらに、カトリック教会の聖職位階制度、修道制を否定した。
 - ④また、聖職売買、親族コネ、性的乱脈、世俗化などを批判した。
 - ⑤19年には、教皇が教会の首長であることにさえ反対した。
 - ⑥ルター（ドイツ人）は、アゴスティーノ会士で、神学教授でもあった。
 - ⑦かくして、1200年にわたる神の代理人としての教皇の威信は地に墜ちた。
- (3) 1521年、レオ10世はルターを破門にした（警告文は20年に出された）。
 - ①この宗教的な対立に、中世から近世へと移行しつつあった社会の階層間の抗争が結びついた。
 - ②ルターを応援する知識人、聖職者、農民、民衆がいた。
 - ③また、教皇庁の支配権から逃れることを望んでいたドイツ諸侯が彼を援護した。
 - ④これらの領主は、教会を国家の上ではなく下におく領封教会制を形成した。
 - ⑤カトリック教会を信望する勢力が対抗し、それまでひとつの教会のもとにまとまっていた

ヨーロッパは、真っ二つになった。

⑥カトリック教会を支持する最大の勢力は、神聖ローマ帝国だった。

(4) ドイツ、フランス、ネーデルランドは、百年も続く宗教戦争に突入した。

①その結果、カトリックに残ったものは、イタリア、スペイン、ポルトガル、フランス（内部に新教徒を抱えて王はカトリック）、オーストリア、南部ドイツ、ベルギーなど。

②ドイツ北部、スイス、北欧三国、オランダ、イングランドは離れた。

(5) ルターの貢献

①1534年、ルターは聖書全巻のドイツ語訳を完成し出版。統一ドイツ語の形成に寄与した。

②宗教改革は、その後、近代の世界を形作る国家の独立と抗争という新しい世界の枠組みを産み出したという意味で、重大事件であった。

③ルターが登場しなければ、宣教師は日本に来なかったかもしれない。

2. 反宗教改革

(1) 北イタリアのトレントで1545年から63年まで、トレント宗教会議が開かれた。

①これは、宗教改革に対する教皇庁のリアクションであった。

②イエズス会は、1534年に結成され、1540年に公認された。

③従って、イエズス会は反宗教改革のために結成されたわけではない。

(2) 世界布教の理由

①カトリックはヨーロッパ内部で多くを失った。

②大航海時代で世界は広大になった。

③世界帝国主義が周縁諸国を植民地化したとき、カトリック教会は失地回復のためにそこへ出かけ、住民をキリスト教化しようとして宣教師を送り込んだ。

④新しくスペインが植民した南部・中部アメリカ

⑤新しくポルトガルが植民したインド、マカオ、フィリピン

3. 大航海時代

(1) ヨーロッパの15、16世紀は、大航海時代である。

①1498年、ヴァスコ・ダ・ガマが大西洋を迂回して喜望峰を通過し、インドのカルカッタに到着した。

②このインド航路の開拓によって、ポルトガル海上帝国の基礎が築かれた。

③ポルトガルには、国土が狭いという地理的条件があった。

④ポルトガルが、海外支配に向かったのは、自然のことである。

- ⑤ポルトガルの大型船は、海洋貿易を支配した。
 - ⑥ポルトガルとアジアの交易のなかで最大の利益を生んでいたのは、インドと中国と日本を結ぶ三角貿易であった。ゴア―マカオ―長崎。
 - ⑦マカオから日本に行く時には、中国の絹糸、金、陶器などを持って行く。銀を中国に、金を日本に持って行くことで、利益が上がった。
- (2) 1571 年、スペイン人がフィリピンのマニラを占領した。
- ①それ以降、ここはスペイン人による中国・メキシコ交易の中心になった。
- (3) 1580 年、スペイン・ハプスブルク家のフェリペ 2 世がポルトガル王位も継承（フィリペ 1 世）したが、その後も、日本との交易はもっぱらマカオに基礎が置かれ続けた。
- (4) 世界は日本に出会った。日本は世界に出会った。
- ①それまでも交流はあったが、断片的なものであった。
 - ②長期滞在した宣教師たちが、初めて日本を経験し、世界に知らせた。
 - ③日本は戦国時代。
 - ④大名は戦争に打ち勝つためにあらゆる種類の西洋の文明を必要としていた。また、交易から上がる巨大な利益を戦費にしたがった。
- (5) 反宗教改革と大航海時代の植民事業
- ①このふたつは密接にからみあって進行していったが、同時発生ではない。
 - ②地理上の発見と植民が最初にあり、教会の危機は 16 世紀後半にやってきた。

4. 日本は戦国時代

- (1) 応仁の乱（1467～77 年）以降、日本は戦国時代になった。
- ①下剋上の争いの中で、中世的な秩序が崩壊した。
 - ②戦国大名がそれぞれに富国強兵策を採用して、ひたすら自己の所領の拡大という欲望の追及のために、戦争に明け暮れた。
 - ③宣教師たちが来日した時代は、戦国時代の末期である。
- (2) 庶民の暮らし
- ①この世は武力がすべてであり、戦争は日常茶飯事であった。
 - ②戦争は、平和な暮らしばかりでなく、その労働力や生命も奪われていった。
 - ③庶民にとっては、戦乱、一揆、火災、疫病、飢饉などは当然であった。
 - ④病人、肢体不自由者、飢えのために子供を殺すしかない妊婦などが溢れていた。
 - ⑤死者の埋葬は、犬のごとく儀式もなく行われた（庶民が、十字架を掲げ、懇願の祈祷を捧

げて埋葬する宣教師に感激したのは当然である)。

- ⑥富も力も持たない下層民は、身も心も虐げられていた。
- ⑦彼らの心や生命を救うことができるのは、宗教だけであった。
- ⑧しかし、もともと慈悲を旨とする仏教も、莫大な財産をもっぱら戦国の闘争に使ってしまった。

(3) 日本の植民地化の可能性

- ①「日本がキリシタンを追い出し、鎖国したのは正しい。そうでなければ、世界帝国に植民されていただろう」と主張する人もいる。
- ②しかし、その説には根拠がない。
- ③日本には、植民される要素がないのである。
- ④広大で肥沃な土地もないし、プランテーションで働かせる大量の奴隷も提供できない。
- ⑤後に、ヴァリニャーノは、「日本は土地が狭く痩せているから、征服してもなにもならない」と書いている。
- ⑥ヨーロッパが広大な土地を征服し支配できるようになるのは、ずっと後代の産業革命を達成してのことだった。

§2 フランシスコ・ザビエル

I. ザビエルの来日

1. イエズス会

- (1) イエズス会（Societas Iesu）（英語では Society of Jesus、S. J.と略される）
 - ①スペイン出身のイグナティウス＝デ＝ロヨラが、パリ大学の同窓であったフランシスコ・ザビエル、ピエール・ファールらとともに、1534年に結成したカトリックの修道会。
 - ②1540年、ローマ教皇の認可を得た。
- (2) プロテスタンティズムに反対するために創立されたものではなかった。
 - ①墮落したカトリック教会の内部改革を推し進めた。
 - ②また結果的に、プロテスタントの宗教改革に反する一大勢力ともなった。
 - ③その結果、16、17世紀のヨーロッパの大部分がカトリック信仰にとどまることになった。
 - ④当時新しく発見された東洋やアメリカ大陸にも布教活動を展開した。
 - ⑤ザビエルを東アジアへと送り込んだ。
- (3) イエズス会は、様々な歴史的な変遷、解散の危機を経て、現在も世界的に活動している。第2修道会として聖心会、サンモール会などがある。
 - ①世界的に多くの教育機関の設立母体となっている。
 - ②米ジョージタウン大学やサンタクララ大学。
 - ③上智大学、エリザベト音楽大学、六甲学院、栄光学園など。

2. ザビエルと日本人の出会い

- (1) スペイン・ナバラ生まれのカトリック教会の司祭、宣教師
 - ①イエズス会の創設メンバーの1人
 - ②バスク人
- (2) 1541年、リスボンを船出してインドに向かう（ポルトガル王ジョアン3世の命）。
 - ①ジョアン3世は、東洋の国々をキリスト教に改宗させることも自分の義務だと考えた。
 - ②教皇パウロ3世に宣教師の派遣を依頼した。
- (3) 1548年、マラッカで3人の日本人に会う。
 - ①アンジロウ（ヤジロウ）、洗礼名「パウロ・デ・サンタ・フェ」。

- ②日本は有望な宣教地であることを聞いた。
- (4) 1549 年（天文 18）8 月 15 日、ザビエルの一行、鹿児島に上陸。
 - ①日本布教長コスメ・デ・トルレス神父、ジョアン・フェルナンデス修道士、アンジロウなど。
 - ②種子島に明国船が漂着した（ポルトガル人による鉄砲紹介）のは、1542 年である。
- (5) 1551 年、京都に上る。
 - ①鹿児島、平戸、博多、山口、岩国、海路で堺へ、そして京都。
 - ②京都での滞在は、わずか 11 日間。
 - ③再度山口に帰る。平戸の琵琶法師ロレンソが受洗した。
- (6) 同年 11 月、中国に向かうために離日。
 - ①同年 12 月、滞在中の中国の離島（上川島）で死去。46 歳。

3. ザビエルの日本人評価

- (1) 日本人を高く評価した最初の人ザビエルである。
 - ①この世界で日本人ほど質問好きな国民はなかった（他の宣教師も同様）。
 - ②彼はとうとうんざりして、日本に送る宣教師はなにもかも知っている知識のかたまりのような人間でなくてはだめだとしている。
 - ③彼は、知識を布教の方便とみているようだ。

(2) 手紙の内容

「日本人は非常に好奇心に富み、知識に渴し、問題を出し、またその答えを聞いて、少しも疲れない。新事物を聞くこと、とくに宗教上のことを聞きたがるのは、そのもっとも好むところで、われらが来る前にも、終始宗論を戦わして自分の宗派のえらいことを争っていた。しかるにわれらの宗教を聞いて以来、キリシタン宗以外のことは語らず、家内でも路上でもデウスの法について論じているのは驚くべきものがある。彼らが持ち出す問題をくわしく記せば、尽きることを知らない」（1551 年 11 月 20 日の手紙）

「われわれが説く教えに対して、彼らがはなはだしく異議を提出することのひとつは、この教えがわれらの渡来以前には日本に示されていなかったということであり、もしデウスの教えに従わぬ者が地獄に墜ちるといふのであれば、デウスは日本の先祖には教えを示さなかったということになる。それに対して、日本人も中国人も殺し、盗み、誑利（きょうり）その他の悪事は悪いと知っており、それを知らずに善悪の分別はあったのだから、デウスの教えを知っていたのだと教えるのである」（1552 年 1 月 20 日の手紙）

「…日本に来る神父は、日本人のする無数の質問に答えるための学識を持つ必要がある。…神父は、よき哲学者であることが望ましい。また、日本人との討論において、その矛盾を指摘するために、弁証法学を知っていることがなおいっこうである。それから宇宙の現象のことも知っていると、ますます都合がよい。なぜなら日本人は、天体の運行や、日蝕や、月の満ち欠けの理由などを、熱心に聞くからである。また雨の水はどこから生じるのかをはじめ、雪や霰（あられ）、彗星、雷鳴、稲妻など、万般の自然現象の説明は、民衆の心を大いに引き付ける。…彼らは地球が丸いことも知りません。太陽の軌道についても知りませんでした」（1552年4月9日）

4. ザビエルが糾弾した日本の三大悪習

(1) 偶像礼拝

(2) 男色

① 仏僧の犯す女犯（にょぼん）、男色

(3) 間引き

- ① 生まれて7日以前は人間ではないと思われていた。
- ② 仏教的な立場では、これを大罪として禁じるよりは、死んだ子の菩提を弔ったり（死者の冥福を祈って読経などをして供養する）、供養したりすることの重要性が強調されていた。
- ③ 間引きに関して、文化摩擦の中でも、特に深刻な問題を引き起こした。
- ④ 宣教師たちが運営する福祉施設は、仏教僧から攻撃を受けた。
「白人の宣教師が赤ん坊を集めているのは、それを『食うため』である」

(4) 日本人の「議論好き」と儀礼的な「交際好き」には、閉口したようだ。

5. 翻訳上の問題

(1) ザビエルが布教書を作ろうとしたときに最初に犯した誤訳

- ① 最初の助言者アンジロウは、倭寇あがりの武士か。
- ② 仏教の教義に無知であった。彼は、デウスを「大日」（真言密教の本尊）と訳した。
- ③ 知的な人たちを教化するにあたって、神や秘蹟に関する訳語のミスが問題になる。

(2) それ以降、ラテン語を日本語風に言い換えることになった。

- ① 大日は、デウス。
- ② アニマ（靈魂）、エウカリスタ（聖餐の秘蹟）など。

(3) 巡察師ヴァリニャーノが日本に来て（1579年、天正7）、翻訳は一挙に進んだ。

- ① 今回はむしろ仏教に使われている言葉を進んで使った。

*色身（肉体としての体。物体として必ず滅び去るもの）

*靈魂（身体のなかにあるものだが、そこから離れ去ることができ、心の本質とされるもの）。キリスト教徒はこれを多くの場合アニマと呼んだ。

*現世、来世（後世）などの仏教用語を使って、そのままキリスト教の死後の世界を説明することができた。

②キリスト教の思想を盛り込む日本語、つまり観念が日本にすでにあったということである。

③日本語にその概念がなく、ふさわしい日本語にできない言葉は、ラテン語の日本語なまりで教義書に書かれた。

*「信仰」はヒイデス。

*「希望」はエスペランサ。

*「他者への愛」はカリダデ。

*「靈魂の救済はされず永遠の地獄に堕ちるとされている大罪」はモルタル（死に至る科）

*「最後の審判」はジュイゾ。

*「地獄」はインヘルノ。

*「天国」はパライゾ。

*「神の恩寵」はガラサ。

*「天使」はアンジョ。

*「サタン」はサタン。

*「悪魔」は天狗。

*「他人を愛する行為」はミゼルコルディア。

*「殉教」はマルティリオ。

*「アマール（愛する）」という動詞は、「大切に思う」と訳した。

(4) 仏教用語を下敷きにした布教

①仏教のもつ慈悲や、救いを求める心を下敷きにして、それとは違った愛や救いがあることを教えた。

②仏教との違いを示すことで、キリスト教の特徴を示すことができた。

③宣教師が熱心に仏教を研究し、仏僧がしばしば教会に探索に出かけた理由は、そこにある。

④日本は原始宗教の国ではなかったのだ。

(5) 双方の類似点は儀式や祭典にもあった。

①ミサでの聖書の朗読は、読経。

②おおぜいの読経は合唱。

③説教は説教。

④ミサと茶道の作法が似ている。袱紗の使い方。

⑤花で飾った祭壇、きらめく荘厳具（キリスト教では聖具）

⑥壁に飾った聖なる画像や、彫刻で作ってあってみなが礼拝する聖像

- ⑦香炉で焚く香
- ⑧灯明
- ⑨数珠（ロザリオ）
- ⑩その他（剃髪、独身、托鉢、巡礼、隠遁生活）

(6) 生じた誤解

- ①多くの初期の信者は、聖母マリアを観音だと思って拝んだ。
- ②隠れキリシタンは、マリア像を観音の像と合体して拝んだ。
- ③布教の初期においては、仏僧はキリスト教を、天竺から渡来した仏教の一派、天竺宗であると信じたほどだった。

II. ザビエルの失望

1. 布教許可

- (1) 日本国家の長に会って正式な布教認可をもらおうと思った。
 - ①そのころ、キリスト教の布教を保護する義務と権利は、スペイン王とポルトガル王がもっていた。
 - ②国王が布教を支援するかわりに、教皇はその土地の所有権を国王に許可した。
 - ③宣教師たちは勝手に布教地に乗り込んだのではなく、一方ではローマ教皇庁の教皇と、他方ではスペイン・ポルトガル国王の許可のもとに組織的に行動していた。
 - ④したがって、布教は基本的に国家と国家の間の協約でなされるべき性質のものになっていた。
 - ⑤軍事力でその国の主権を奪って植民地化するのは、彼らがインドや南アメリカやフィリピンでやったこと。
 - ⑥中国と日本のような独立した国家では、そういう布教方針ではなかった。
 - ⑦中国では、まずなによりも皇帝に拝謁して、布教の許可をもらった。
- (2) ザビエルは、一刻も早く「ミヤコ」へ行って天皇に会いたいと思った。
 - ①1551年（天文20年）に天皇に会いに行った。わずか11日の滞在であった。
 - ②実際に京に行ってみると、会えなかった。
 - ③その後、人々が国王に従っていないという事情が分かったので、許可を願うことをあきらめた。
 - ④都は戦争のために破壊しつくされており、説教をする状態ではなかった。

2. 天皇と将軍

(1) 当時の権力者天皇

①天皇は、神または神にひとしいものであって、異国の神を奉ずる者が会えるわけではない。

(2) もうひとりの権力者将軍

①時の将軍は、足利 13 代将軍義輝で、フロイスによると「公方様（将軍）は少数の重臣を連れて郊外に（戦乱を）逃れていた」とある。

(3) ザビエルは、日本の状況に失望し、中央集権の確立した法治国家である中国に布教したいとの願いを抱いて、日本を去ったのである。

§3 ザビエル以降

I. 布教の進展

1. 来日した代表的な宣教師

- (1) コメス・デ・トルレス神父。スペイン人（1549 年、天文 18、ザビエルとともに）。
 - ①メキシコからルソンへの航海中に遭難した。
 - ②漂着したモルッカ島でザビエルと会い、ゴアでイエズス会に入会。
 - ③ザビエル離日後も、20 年間日本にとどまる。
- (2) ルイス・デ・アルメイダ（1552 年、天文 21）
 - ①ポルトガル人、船長、医者
 - ②1556 年、イエズス会に入会を認められる。
 - ③彼は、方々に改宗説教に出かけ、日本の宣教に大いに役立った。
 - ④おもに大名の説得のためであった。
 - ⑤その人品と知性、論理性、そして科学知識などがそれにふさわしくみえたから。
 - ⑥フロイスは彼を、「永久機械（エネルギーを補充しなくても、自分自身で動く機械）」と呼んでいた。
- (3) ガスパル・ヴィレラ神父（1557 年、弘治 3）
 - ①ポルトガル人
 - ②1559 年（永禄 2）、日本人ロレンソ、ダミアン両修道士とともに京都布教を開始。
- (4) ルイス・フロイス（1563 年、永禄 6）
 - ①ポルトガル人
 - ②『日本史』の著者。
- (5) オルガンティーノ・ニエッキ・ソルド神父（1570 年、元亀 1）
 - ①イタリア人。「うるがん様」と呼ばれ、日本人に人気があった。
 - ②京都で 30 年を過ごし、織田信長や豊臣秀吉などとも知己となった。
 - ③アルメイダ同様、改宗者を多く出した。
- (6) アレッサンドロ・ヴァリニャーノ神父（巡察師）（1579 年、天正 7）
 - ①イタリア人。自然科学、医学、哲学の中心であるパードヴァ大学（数十年後ガリレオが数学を教えた）を卒業した。

- ②イエズス会東インド管区の巡察師として来日。
- ③1582 年（天正 10）、天正遣欧少年使節とともに離日。
- ④1583 年（天正 11）、『日本諸事要録』（スマリオ）を著す。
- ⑤1590 年（天正 18）、帰国する遣欧使節を伴って 2 度目の来日。
- ⑥1591 年（天正 19）、聚楽第で豊臣秀吉に謁見。
- ⑦日本で初めての活版印刷機を導入、後に「キリシタン版」とよばれる書物の印刷を行っている。
- ⑧1598 年（慶長 3）、最後の来日では日本布教における先発組のイエズス会と後発組のフランシスコ会などの間に起きていた対立問題の解決を目指した。
- ⑨1603 年（慶長 8）、最後の巡察を終えて日本を去り、3 年後にマカオでその生涯を終えた。

2. イエズス会と軋轢を起こすフランシスコ会の理念

(1) フランシスコ会

- ①13 世紀のイタリアで、アッシジのフランチェスコによって始められたカトリック教会の修道会の総称。
- ②広義には第一会（男子修道会）、第二会（女子修道会）、第三会（在俗会）を含む。
- ③日本には、イエズス会よりも遅れてやって来た。

(2) フランシスコ会の宣教師たち

- ①フランシスコ会は、無所有と清貧の精神にもとづき活動した。
- ②スペイン人のフランシスコ会士は、教祖のフレンチェスコの着ていた毛布のような粗い服を着替えなかったし、裸足でサンダルのまま歩き回った。

3. イエズス会の理念

(1) 最も有効な宣教手段は、最高の権力者を味方にとすることだという考えがあった。

- ①大衆の間での辻説法という水平型伝道。もちろんこれも実行した。
- ②封建制下の君臣—主従関係における上下垂直型伝道。これを重視した。

(2) 社会的上層部への働きかけを不可欠とした。

- ①彼らの活動が始まったのは 16 世紀なかばである。
- ②この時代に、西欧においては封建制が次第に変容し、強力な権力を持った王による絶対主義が確立した。
- ③君主を絶対とする社会制度が、その道徳をも支配していた時代であった。
- ④君主の権力なしには宗教活動もできない。実際、布教の擁護をしているのもポルトガル王、スペイン王だった。

- ⑤日本での布教もまた、最高君主の公認のもとにやるべきだと、宣教師たちは考えたが、戦国時代だったため、だれが最高権力者なのか分からないことが多かった。
- ⑥群雄割拠していたので、どの殿様にも話をつけていなければならなかった。
- ⑦会士のほとんどが貴族の出身だった。ロヨラはスペイン貴族の出身で、中世騎士道的な教養と精神を持っていた。ザビエルもまた、スペイン貴族の出身であった。
- ⑧彼らは、本能的に日本の武士が好きで、日本の大名たちも、礼儀正しく威儀を重んじる彼らと共感することがあった。
- ⑨これは、フランシスコ会の民衆的な手法や考えとは真っ向から対立し、日本でもこの両派の対立と葛藤が多くの問題を引き起こすことになる。

(3) ヴァリニャーノの観察

- ①彼は、日本では貧しいということは大変不名誉なことであると書いた。
- ②日本で尊敬されるためには、司祭は服装をよくしなければいけない。禅僧が着ているような黒い絹の服を身につけたほうがよい。
- ③その後、イエズス会士のあいだでは、絹を着るか、毛織を着るかで、意見が対立した。

(4) 教育の強調

- ①青少年のための教育機関を世界各地に造っていた。
- ②基礎教養科目から専門課程に至る組織的な学制をつくった。
- ③それは世界の教育史上画期的なもので、近世教育のさきがけであった。
- ④特に、科学と数学が重視された。
- ⑤ヴァリニャーノは、組織的な学校制度を整備し、ヨーロッパの最新の科学知識も印刷出版した。活版印刷の技術や機械を持ってきたのは、彼であった。
- ⑥1590年（天正18）に日本のコレジオの教科書になったペドロ・ゴメスの『二儀略説』には、日本人が知りたかったことがたくさん書いてある。

II. 宣教師たちが見た日本人

1. 高く評価された日本人の知性

(1) ジョアン・ロドリゲス・ツーズ

- ①日本に長くいて日本語と日本文化を研究したポルトガル人の神父。
- ②世界最初の日本語の辞書を編纂出版した。
- ③文法教科書『日本語文典』、『日本語小文典』、『日本教会史』などの著者。

「この東洋のあらゆる人のなかで、彼らは神聖なものに対する帰依や崇拜をもっとも強くもっている人びとである。彼らは偽りの神に長命、健康、富、繁栄、子孫などの現世的な恵みを願うばかりではなく、来世の救済もひたすら求めているのである。…この証拠は壮麗な寺院、僧侶への大いなる

尊敬と崇敬、偶像への祈願と喜捨において示されている。…しかし福音が日本に述べ伝えられてからは、偶像に対するこの信心や熱心さは急激に冷えていった。というのは、彼らは継続的に真理について聞き、それが彼らの闇をはらしつつあるからです。神の恩寵によって真理を知るようになったからです」

(2) ルイス・デ・アルメイダ

- ①アルメイダが最初に派遣されたのは、1562年の薩摩だった。
- ②ザビエル以来、誰も布教に行っていないが、古い信者が一行を歓迎した。
- ③数回説教したあと、聴いていた人たちが洗礼を受けたいと言った。
「最近発見された多くの国の中で、これほど明らかに知性をもった人びとをわたしは知らない」

(3) 組織的教育が可能な国民

- ①日本の民衆や、とくに知識人、僧侶などが熱心に知りたがることからについて、宣教師は教会に学校をつくって組織的に教える必要を感じた。
- ②キリスト教を教えること以外に、初等知識全般が含まれる。
- ③1561年（永禄4）ごろから、キリシタンの子供を対象に、初等教育—日本語、漢字、数学など—を始めた。
- ④1569年（永禄12）ごろには、五島で教会学校用教科書『貴理師端往来』ができた。
- ⑤1581年（天正9）には全国で200校もあった。
- ⑥庶民の子供、女子にももちろん、読み書き、音楽、作法、ローマ字その他を教え、大人のための夜間学校もあった。

2. ヴァリニャーノの布教方針

- (1) 最初の来日で、ポルトガル人準管区長フランシスコ・カブラル（当時の日本地区の責任者）のアジア人蔑視の姿勢が布教に悪影響を及ぼしていることを見抜いた。

- ①1582年（天正10年）、カブラルを日本から去らせた。

- (2) 日本における宣教方針として、「適応主義」と呼ばれる方法をとった。

- ①ヨーロッパのキリスト教の習慣にとらわれず、自分たちを日本文化に適応させる。
- ②ヨーロッパのやり方を押し通すフランシスコ会やドミニコ会などの托鉢修道会の方法論の逆を行くもの。
- ③ドミニコ会は、1206年に聖ドミニコ（ドミニクス・デ・グスマン）により設立。
1216年にローマ教皇ホノリウス3世によって認可されたカトリックの修道会。フランシスコ会同様、清貧を重んじた。神学研究の伝統があり、アルベルトゥス・マグヌスとその弟子トマス・アキナスを輩出した。
- ④ヴァリニャーノは、イエズス会以外の修道会が日本での宣教を行うことを阻止しようとし

た。これが、イエズス会と托鉢修道会の対立につながる。

(3) 1581 年（天正 9 年）、イエズス会員のための宣教のガイドラインを著した。

- ①『Il Cerimoniale per i Missionari del Giappone（日本の風習と流儀に関する注意と助言）』
- ②宣教師たちの日本社会のヒエラルキーにおける位置づけをはっきりと示した。
- ③イエズス会員たちは、社会的地位において同等であると見なす高位の僧侶たちのふるまいにならうべきである
- ④当時の日本社会は、ヒエラルキーに従って、服装、食事から振る舞いまで全てが細かく規定されていた。
- ⑤イエズス会員たちは、高位の僧侶たちのように良い食事を取り、長崎市中を歩く時も、彼らにならって従者を従えて歩いた。
- ⑥このようなやり方は「贅沢」だとして、日本のイエズス会員たちはヨーロッパで非難された。

(4) 日本人司祭の育成

- ①ヴァリニャーノは、日本人の資質を高く評価した。
- ②前任者のカブラルが認めなかった日本人司祭の育成こそが急務と考えた。
- ③司祭育成のために教育機関を充実させた。
 - *1580 年（天正 8）に、肥前有馬（現：長崎県南島原市）と近江安土（現・滋賀県近江八幡市安土町）に小神学校（セミナリヨ）設立。
 - *1581 年（天正 9）に、豊後府内（現：大分県大分市）に大神学校（コレジオ）設立。

(5) 巡察師として日本各地を訪問

- ①大友宗麟・高山右近・織田信長らと謁見している。
- ②1581 年（天正 9）、織田信長に謁見した際には、安土城を描いた屏風（狩野永徳作とされる）を贈られ、屏風は教皇グレゴリウス 13 世に献上された。
- ③現在、その存在は確認されておらず、行方不明のままである。
- ④黒人の従者を信長が召抱えたいと所望したためこれを献上した。
- ⑤その黒人は、弥助と名づけられて信長の直臣になった。

3. アコスタの布教住民分類

(1) ホセ・デ・アコスタ（アメリカにおけるイエズス会の指導者）

- ①アコスタの布教住民分類（1577 年 2 月 23 日の書簡）
- ②彼は、宣教地の人びとを 3 つに区分した。

(2) アコスタの 3 区分

①西洋文明を羨望しない。彼らみずからがきわめて高度の文明を持つ人種。

＊中国人、日本人、東インド人

②白人にくらべるとかなり後進的だが、相当高度な文明を持った人種。

＊イスパニア領アメリカ人とアステカ人、ポルトガル領インド人

③「本来の野蛮人」で、大部分は遊牧民であり、「墮落した凶暴な住民」である。

(3) アコスタの提言

「第一の住民に対しては使徒時代のギリシア人、ローマ人、そのほかのアジア人およびヨーロッパ人と同一の方法で布教すべし」

①ポルトガル人の宣教師カブラルは、1570年（元亀1）から82年（天正10）まで、12年間日本管区の準管区長をしていた。彼は、「同化策」の代表のような男だった。

②巡察師ヴァリニャーノは、日本に来てすぐにその誤りに気付いた。彼は、「非ヨーロッパ的なキリスト教文明の出現」を願った。

③今では、これを「文脈化」「文化脈化」と呼び、宣教学の常識となっている。これが最も成功したのが（一時的だったが）日本だったと言われている。

④つまり、日本人は「白人」の範疇に入れられたのである。

4. 日本および中国における布教状況

(1) そのほかの国とはまったく違っていた。

①日本も中国もヨーロッパの政治的権力の圏外にあった。

②イエズス会は、「とびぬけて進んだふたつの文明」と初めて遭遇した。

③西洋側の発想の転換が求められた。それが、イタリア人ヴァリニャーノによる方針転換である。

(2) イタリア人宣教師

①ヴァリニャーノ、リッチ、ルッジェーリ、オルガンティーノ（秀吉と信長に信頼された）は、みなイタリア人宣教師。

②彼らは、人文主義課程に重きを置くイエズス会のコレジオで学んだ。

③日本と中国での布教は、ザビエルが開始したものの、決定的にヴァリニャーノによって形作られたものである。

④そして、日本における布教は、6世紀以降、カトリック教会が遭遇した世界のすべての教養ある文化の高い地域において、最も成功したものとなった。

(3) ポルトガル人宣教師とスペイン人宣教師

①ヴァリニャーノは、ポルトガル人と日本人の関係は許容できると思った。ポルトガルは領土的野心を持っていなかった。

- ②しかし、スペイン人の場合はそうではない。スペインは征服国家であった。
- ③だれもアメリカやフィリピンから来てはならない。たとえイエズス会士であっても。そこから来る者たちは、コンキスタドル（征服者）精神に汚染されているからである。

§ 4 織田信長と宣教師たち

Ⅰ. 都での布教

1. 将軍からの布教許可

(1) 京での布教は、1560 年（永禄 3）、ガスパル・ヴィレラが将軍足利義輝から布教許可を得たときに始まった。

① 布教は、仏教勢力の強硬な反対、戦国武将らによる騒乱や戦争などで困難を極めた。

(2) 京を支配する「三好三人衆」と松永久秀

① 三好長慶（ながよし）の家臣長逸（ながゆき）、政康、岩成友通（ともみち）

② 長慶の家臣だった、商人出の松永久秀。

③ 松永は 1563 年に主人長慶の跡継ぎである義興（よしおき）を毒殺し、まだ幼かった義継（よしつぐ）を後見して実権を握った（下剋上の典型）。

④ 1565 年（永禄 8）、彼は三好三人衆と結託して将軍足利義輝を襲撃し、自殺させた。

⑤ この時、ヴィレラ神父らは京を追われ、堺に逃れた。

⑥ この年、天皇による禁教令が出された。

⑦ 最終的に、松永久秀は、1577 年（天正 5）に信長に反逆して信貴山城で敗死した。

⑧ 松永秀久の 3 大悪

＊主君への反逆

＊将軍殺害

＊東大寺大仏殿焼き打ち

2. 信長の上洛

(1) 1568 年（永禄 11 年）、信長は足利将軍義昭を奉じて京に入り、天下人としての一步をしるす。

① 入京後、皇居の修理、朝儀の復興、伊勢の造替などを行って朝廷の面目を一新。

② 信長が京に上るまで、ここには 5 年間神父がいなかったし、布教もなかった。

(2) 信長の運命とキリスト教の隆盛とは、不可分の関係にある。

① 信長が栄えるとき、教会も栄え、信長が滅びるとき、教会も滅びに向う。

「彼はすぐれた理解力と明晰な判断力を備えた人であり、神仏の祭祀はどんなことでも軽んじ、占いや迷信を軽蔑する」（フロイスの『日本史』）

(3) 堺の平定

- ①堺に5人の武将と15,000の兵を送って都市を平定し、安堵（土地の所有を承認）したので、町はたちまち平穏に戻った。
- ②信長は、堺を直轄領としてしまい、楽市、楽座などと呼ばれる自由な商業活動を保護する政策を行った。

II. 日本の権力構造

1. 最初の禁教令は天皇から

(1) 1565年（永禄8）7月5日

- ①内裏への三好義継の奏請（背後に松永久秀がいる）で、正親町（おうぎまち）天皇から宣教師追放の女房奉書が出た。
 - *「今日左京太夫禁裏女房奉書出、大うすはらひたるよし」
 - *「大うす」とはデウスのこと。「すす払い」にひっかけてある。
- ②これは、最初の天皇の綸旨（りんじ）による禁教である。
- ③正親町天皇の周辺には、頑強な反キリシタン勢力があった。

2. 戦国時代の天皇

(1) 戦国時代の天皇は政治的に無力であった。

- ①しかし、天下をとろうとする戦国武将に担がれて、天下統一のシンボルとなった。
- ②天下争奪戦が、天皇の地位を浮上させた。
- ③足利幕府は、武家文化を奨励してきた。
 - *それまで支配的だった公家主導の宗教や文化に対抗するため。
 - *禅宗、能、茶の湯など
- ④初期には幕府の力が圧倒的に強く、天皇を無力化し、ロボットにした。
- ⑤戦国時代末期には、戦国大名たちによって、足利幕府が無力化された。
- ⑥同じロボットなら、天皇の方が上位である。

(2) 大義名分が必要

- ①下剋上の成り上がり者が天下をとるには、なんらかの名分が必要。
- ②戦国武将たちは、朝廷に頼んで官位を得ようとするようになった。
- ③天皇は最強の権威者として、宮廷儀礼の主宰、官位授与、元号制定権を持続して持っていた。
- ④官位授与の権限をもった天皇が政治的権威を上昇させ、物質的な利益も得た。

3. 天皇が最高の権威をもっていた理由

(1) 天皇は、日本という国の呪術的な宗教の主宰者であったからである。

- ①古代神話による天皇史の作成が行われた。
- ②天皇の先祖を神とする神話。
- ③天皇の先祖神がこの国の創造主であって、その祭祀つまり神祇は天皇によって行われることに決まっていた。
- ④天皇は、広い意味で宗教的な存在であった。
*日本の国土やその産物を支配する呪術的な性格を持った、人間を超えた超存在。

(2) 仏教と天皇

- ①新しい輸入宗教である仏教を、天皇が率先して信仰して、僧職制をしいて任免権を握り、仏教もまた支配の下に置いていた。
- ②フロイスは、比叡山の経済的基盤を支えている広大な土地は天皇から賜ったものだと解説している。
*仏教勢力は土地所有と不可分だった。

(3) 神道と天皇

- ①神道も制度的に朝廷の支配下にあった。
- ②醍醐天皇は、平安時代に延喜式という法律を編纂させた。
*古代から伝わる各地の神々を、ひとつの神宮で治めることに決めた。
*宮司も朝廷が組織するようになった。

(4) 戦国大名と天皇

- ①戦国時代になりあがった大名が領土を統一するには、それらを支配している上の権力に結びつかざるをえない。
- ②将軍の力が弱まってくるに従って、天皇に結びつかざるをえないことになる。
- ③天下人になるためには、将軍と天皇を掌握してしまう必要があった。
- ④野望をもった戦国大名は、まず将軍を奉じ（主君にし）、ついで天皇を奉じることで天下を統一しようとした。
- ⑤秀吉は、自分を公家の猶子（ゆうし）（官位を獲得するために仮の親子関係を結ぶこと）にして関白職をもらって、天皇の権力の下に入って、権力と同一化したのである。

(5) 「鎮護国家」思想と天皇

- ①外敵、とくに蒙古が襲来した13世紀以降、「鎮護国家」の思想が高まっていた。
- ②日本の国全体が、神仏などによって護られている。
- ③天皇の先祖である天照大神を祀った伊勢神宮は、国の護りの要であった。

④外からやってくる怪しいものは、戦争であろうと、宗教であろうと、究極的には、天皇の敵である。

＊この点の理解が極めて重要である（秀吉の禁教令の文句）。

4. フロイスによる分析

(1) フロイスは、自分たちが京都から追放された理由をよく理解していた。

「内裏は宣教師を日本の神と仏に敵対する教えの宣布者として京都から追放したのであり、帰京を許可するには『人間を食べぬことを日本の偶像に誓う事』と要求した」

「人間を食べるなどは『笑うべき虚偽』としたが、それを偶像に誓うことはできないと答えた」

(2) キリシタン禁制の思想

①天皇は、自らが外来の宗教であるキリスト教を排除する力をもっており、「神と仏」の擁護者であることを明らかにした。

②蒙古襲来が神国思想を強化したように、キリシタンとの出会いによって、日本はあらためて天皇の意味を明らかにした。

III. 破壊的改革者織田信長

1. 信長とフロイスの第1回目の会見

(1) 1569年（永禄12）4月、フロイスは信長と将軍に会った。

①和田惟政の尽力による。

②天皇の禁令はまだ効力があつた。つまり、信長にとっては、キリシタンを追い出すか保護するかの、二者択一の場面であつた。

③この会見は、豪華な馳走で歓迎の意を表するだけの間接的なものに終わった。

④ヨーロッパ風の大鏡、美しい孔雀の尾、黒いビロードの帽子、ベンガル産の籐の杖が進物の品物であつたが、信長は帽子だけを取った（礼を失せず、貪欲と言われないように）。彼は、西洋の服装に異常な興味をもっていた。

⑤将軍は病気を理由で会わなかった。乳母が応対した。朝廷の命令があつたから。

⑥しかし、その後信長が会えと言ったときは会った。最終的に将軍は朝廷ではなく、信長の命令に従つたのである。

(2) 信長の輩下に入った松永は、日蓮宗徒であつた。

①彼は、将軍足利義輝を裏切って殺し、その一族をみな殺しにした張本人である。

②彼は、仏教や神道など、信長の天下統一をさまたげる古い勢力と密着していた。彼が宣教師を追放した首謀者である。

- ③その彼が、キリシタンの教えが広まると、国も町も荒らされ破壊されると、信長に進言した。
 - ④彼の言葉の中には、すでに後代の決まり文句が出てきている。キリスト教は日本の国を破壊する忌まわしい宗教だという考えである。つまり国家の敵である。
 - ⑤信長は松永を、「臆病者」とののしった。
- (3) 信長は、外国にも、日本在住の外国人にも、恐れを抱かなかった。
- ①自分自身と祖国の実力について確乎たる信念をもっていた。この点が、秀吉や家康とは異なる。
 - ②信長は、いろいろ宗教があるのはいいことだと考えていた。また、遠い異国からわざわざ京都を選んで来たのだから、名誉なことだ、とさえ言った。
 - ③彼は、仏教が国家の政治の要に食い込み、自分たちの権益を守るために、新しい宗教を排斥するのだということを知っていた。
 - ④天下統一のためには、国家の中の国家のような仏教勢力を弱体化する必要があると考えていた。
 - ⑤遠くから来た宗教が仏教の専制的支配を崩してくれるなら、大歓迎であった。
- (4) 仏教勢力の武装
- ①この時代は、一向一揆に代表される宗教一揆が頻発した時代であった。
 - ②一向一揆は、親鸞を祖とする浄土真宗本願寺系の人々を中心にした戦いだった。
 - ③宗教一揆が、15世紀から16世紀まで100年以上、日本中を巻き込んだ。
 - ④一向宗の中心となった蓮如は、阿弥陀以外のなにも拝まないという親鸞の説に立って、そのほかの指導者を排除したので、既存の仏教勢力から反発を受けた。
 - ⑤一向宗は、仏法自立を壊滅させることによって全国統一をなしとげようとする信長に敗北して行った。
 - ⑥石山本願寺（浄土真宗）もまた、信長とおおよそ10年にわたって戦った。

2. 信長とフロイスの第2回目の会見

- (1) 場所は、二条城の工事現場であった。
- ①今度も、和田惟政の尽力で実現した。
 - ②橋の上で2時間以上もの会見が実現した。
 - ③群衆に、話の内容を聞かせるため。その中には仏教の僧侶たちも紛れ込んでいた。
- (2) 信長は、雑談の中でフロイスに質問し、西洋の情報を収集した。
- ①何歳か、日本に来て何年になるか。
 - ②何年勉強をしたか。

- ③親戚はポルトガルでまた彼と会うことを期待しているか（祖国に帰るのか）。
 - ④毎年ヨーロッパやインドからの書簡を受け取るのか。
 - ⑤ヨーロッパやインドからの旅程はどのくらいあるのか。
 - ⑥日本にとどまろうと思っているのか。
- (3) フロイスは「あまり重要ではない前置き」と書いている。
- ①信長にとっては非常に重要なデータであった。
 - ②信長は、フロイスが王ならびに、これに保護された布教の集団によって正式に派遣された者であることを、理解した。
- (4) ロレンソの説明
- ①信長は、なぜキリスト教の教会が京都には一軒もないのかと聞いた。
 - ②ロレンソは、仏教の僧侶たちが激しく妨害をくり返し、ついに 5 年前に理由もなく神父を追放したいきさつを訴えた。
 - ③この説明によって、信長は仏教がキリスト教の最大の敵であるばかりでなく、朝廷もこれにからんでいることを確認した。
- (5) 信長とフロイスの対話
- 「神父がそんなに遠い国から来たのはどういう動機か」
- 「日本の人びとに、この救済の道を教えること、それによって、世界の創造者であり、人類の救い主であるデウスの御心にかないたいという熱望以外にはいかなる考えもなく、またいかなる世俗の利益を求めてもない」
- 「ただそれだけのために、これほどの長い道のりを航海し、はなはだ大きな、考えるだけでも恐ろしい色々な危険を自ら進んで引き受けたのか」
- 「まったくそのとおり」
- 信長は、僧侶たちを指差し、大声でこう言った。
- 「そこにいるこの騙り者（かたりもの）どもは、そなたのような輩ではない。彼らは庶民をたぶらかし、いかさま者、嘘つきで、尊大はなはだしく、思い上がった者どもだ。予は何度も彼らをみな殺しにして根絶やしにしようと思ったが、民心を動揺させないために、また、彼らを気の毒に思って、彼らは予を憎み嫌っているのを承知してはいるが、彼らをうっちゃっておいているのだ」
- (6) フロイスの提案
- ①日本の仏教の諸宗派の代表たちとの討論を提案した。
 - *比叡山の学者
 - *禅宗の僧
 - *坂東の大学（足利学校、室町時代から戦国時代にかけて関東における最高学府）
 - ②もし神父が負けたら、京都から追放してもかまわない。
 - ③僧侶が負けた場合は、彼らにこちらの教えを受け入れるようにさせるべきである。

- ④そうでないかぎり、僧侶たちはいつも異国人として神父を憎悪し、陰謀をもって迫害するであろう。
 - ⑤信長は、「日本の学者がはたしてこの討論を応諾するかどうかはわからないが、あるいは将来そういうことになるかもしれない」と答えた。
 - ⑥フロイスは、都での布教のための免許状を要請した。
 - ⑦「その恩恵によって殿下の偉大さが世界に広まるであろう」と言うと、信長は嬉しそうな顔を見せた。彼の目は、世界に向かっていた。
 - ⑧彼は、宣教師たちを外交官のように扱っていた。
- (7) 信長は彼らが用意した贈り物は受け取らず、免許状を与えた。
- ①信長は和田惟政に命じて城内を案内させ、将軍にも面会させた。
 - ②こうしてフロイスはついに将軍に会って、盃をもらい、公式の訪問をすませた。
 - ③安定した布教活動のためには、信長の朱印状が必要だった。
 - ④1569年（永禄12）4月8日、御朱印が出た。これは信長の領国内だけの免許。
 - ⑤同4月15日、将軍の制札が出た。これは全国の免許である。
 - ⑥かくして、京での布教が信長と将軍によって許可された。
 - ⑦この2通の免許状は大きい文字で板に書いて、教会の入り口にかけられた。

3. 信長とフロイスの第3回目の会見

- (1) お礼を言うためのもので、これもまた和田惟政の指導による。
- ①贈り物として精巧な目覚まし時計を持って行った。
 - ②信長は驚いたが、自分には手入れができないので無益の物となると言い、返した。
 - ③信長は、インドやヨーロッパの国情を2時間にわたって聞いた。
 - ④スペイン、ポルトガルの帝国事情は、信長に日本統一の現実性を意識させたにちがいない。信長の目は、世界に向けられていた。

4. 信長の本音

- (1) 安土において、オルガンティーノとロレンソと信長は3時間も議論をした。
- ①周りに多数の武将がいた。
 - ②信長は議論を好み、宣教師らの知性を愛した。
 - ③彼は、僧侶集団の勢力をつぶすために多くの破壊や殺戮を行ってきた。しかし、それよりも新しい宗教の到来によって心の革命が起こる方がいい。討論や議論によって、道理のある者が勝てばいい。そうしなければ、ほんとうの統一政権はできない。そう考えていた。
- (2) 信長の信仰

- ①信長が宗教に関心があったとは、どの宣教師の報告にも書かれていない。
- ②信長は、宣教師たちが本当に来世を信じているとは、信じなかった。
- ③信長はあるとき、フロイスに向かって、「予はおまえたちの神を信じない。日本の神も仏もだ」と言った。
- ④信長がキリスト教を保護したのは、政治的な理由のためである。
- ⑤彼は、ポルトガルやスペインの王国のことを宣教師から聞き、自分も日本国家のただひとりの王になることを考えた。
- ⑥時代は、中世的封建制から、近世的絶対王政への歴史的過渡期にあった。
- ⑦彼は、みずからが「神」になること、そして中国を征服し、アジアの支配者となることを考えていた。

§5 キリスト教と仏教

I. 討論の伝統

1. 宗義論争の習慣

- (1) 1536 年（天文 5）、天文法華の乱がおこった。
 - ①比叡山の信徒が、京都の日蓮法華宗徒を襲撃し、21 の寺を焼き払った。
 - ②三条より南の下京が全部消失し、上京も 3 分の 1 が焼失。
 - ③京都町衆を中心とする日蓮宗徒は、一向一揆や土一揆に対抗して法華一揆を起こし、京都で大きな影響力を持つようになり、比叡山延暦寺との間に天文初年から対立・葛藤が続いていた。
- (2) 直接の原因は、「宗義論争」の敗北であった。
 - ①一条烏丸の観音堂で、比叡山天台宗の華王房（かおうぼう）と、日蓮集信徒の松本左衛門が「宗義論争」をして、比叡山側が負けた。
 - ②ザビエルの来日は、それから 13 年後のことである。
- (3) キリスト教とさまざまな宗派との「宗義論争」が行われた。
 - ①この時代としては普通のことであった。
 - ②最初のころ、人々は新しく来たキリスト教も天竺（インド）から来た宗派のひとつだと思って、たいして驚かなかった。

2. 仏僧との交流

- (1) ザビエルと忍室の交流（鹿児島）
 - ①忍室は、曹洞宗福昌寺第十五代の座主で東堂と言う地位にあった（80 歳過ぎ）。
- (2) アルメイダと忍室の交流
 - ①アルメイダは彼が眼を患っていると聞いていて眼薬を持っていった。
 - ②治療している間に、住職はいろいろな質問を浴びせた。
 - ③アルメイダは「すこぶる知識欲に燃えていて、日本人にしては謙遜」な人だったと書いている。
 - ④彼は宗教のことや神のことばかりではなく、宇宙の森羅万象について尋ね、しまいには「とうてい答えることのできない質問」に夜半までつきあわなければならなかった。
 - ⑤自然現象に関する質問

「なぜ四季が移ろうのか」

「なぜ雨が降るのか」

「なぜ満潮干潮があるのか」

「宇宙の創造主は存在するのか」

- ⑥アルメイダは、大学で習ったアリストテレスの形而下学を説明し、天文学の要点を話した。
- ⑦住職はすっかり感心して、たいそう歓喜した。
- ⑧そのあと忍室は、キリスト教を信仰していることを公にし始めた。
- ⑨彼のような知識人がキリスト教を認めたのは、理屈や経験を大事に思う種類の人だったからだろう。
- ⑩日本人は本来、非常に理性的で、好奇心が強く、「科学的」な国民だった。

(3) アルメイダと南林寺の住職の交流

- ①福昌寺の末寺である南林寺という禅宗の寺の住職に招かれて、彼の部屋に泊まり、日夜質問を浴びせられた。
- ②この住職は、「ひそかに洗礼を受けたい。この寺にくる人びとに対してははじめは禅宗の瞑想を教え、あとは福音の教えの真理を認めさせるように導くことにしたいがどうだろうか」と言った。
- ③アルメイダは、キリスト教の神を信じるなら禅宗の住職であることをやめなければならないと言ったので、住職はやむなくキリスト教徒になることを諦めた。

3. 宣教師の伝道法

(1) ヴァリニャーノの『日本のカテキスモ』（1580～81年）

- ①1960年に、ポルトガルのエヴォラ図書館で発見された古屏風の下張り文書
- ②改宗した仏僧パウロ養方軒の協力で編纂したキリスト教の説明書

(2) 内容

「善意の異教徒を説き伏せるには、つぎの三点を教示する必要がある。第一に、救いは仏教や神道いずれの宗派でも不可能である。第二に、創造主、世界の作り主である唯一の神のみが存在する。そしてこの方こそ、人びとが救いにいたるためにまもらなければならない掟を与えられた。第三に、魂は不滅であり、また唯一の神を認め、そのかたの掟を遵守した者が、永遠にわたって幸せを楽しめる別の世界での生活に入れる。反対に、その掟をないがしろにした者は、来世で永遠に苦しむべく罰せられるであろう」

「この熟考の結果、善意にあふれ、しかもさほど道徳的に腐敗していない多くの異教徒たちに改心の実を結ばせた」

(3) キリスト教の優越性を説く。

- ①覚えきれないほどの数の神や仏を否定して、唯一絶対の神の存在を主張することが、その

当時は、キリスト教の優越を説くことになったのは確かである。

- ②どの大名にも、どの僧侶にも、まず唯一の創造者の話をして、信者を獲得していった。
- ③当時の日本人は、こういうふたつの宗教の選択を迫られた。

4. 高山友照（ダリオ）の回心

(1) 討論の吟味役

- ①松永久秀の有能な家臣として沢城を預かっていた。
- ②松永は、日蓮宗の狂信的信者であった。
- ③ヴィレラが布教のために堺を訪問しようとしていたので、比叡山の僧侶が松永らに、神父追放を要請した。
- ④そこで松永は、清原技賢という学者とヴィレラに、討論をやらせることにした。
- ⑤1564年（永禄8年）、高山ダリオと結城山城守心斎が吟味役（審判）となった。
 - *ともに仏教に詳しい。
 - *神父の説を吟味し、なにか不合理なことがあったらただちに断首する予定。

(2) 松永の主城である奈良にヴィレラとロレンソ（盲目の琵琶法師）を召喚した。

- ①教会の人びとは、神父の生命を守るために、ロレンソのみを派遣した。
- ②学者と日本語で議論することができるのはその頃はロレンソしかいなかった。
- ③ロレンソは、宇宙には作者がいることと、人間の靈魂の不滅について数日間にわたって話し続け、ひっきりなしに討論した。
- ④聞いていた高山は自分の目からウロコが落ちるような気がした。

(3) 意外な展開

- 「初めて、世界の創造、人類の贖罪、人間の靈魂の不滅について知識を得て、彼らがそれまで信じていたこととまったくちがうことを聞き、これに関して多くの質問を發し、満足すべき答えを得たとき、主は最初に高山に恩寵の光を分かちたまひ、ついでほかのふたりもその家族とともに改宗するにいたった」（フロイス）
- ①討論の相手もふたりの吟味役もキリスト教に入信してしまった。
 - ②そこでヴィレラが洗礼のために来るという意外な展開になった。

(4) 高山は沢城で家族を改宗させ、1563年（永禄8年）に長男の右近に洗礼を受けさせた。

- ①右近が11歳か12歳のときの洗礼であった。
- ②高山城にいたダリオの母も、侍女、侍臣とともに洗礼を受けた。
- ③ダリオは大名ではなく松永の家臣だったので、教会を設ける力はなかった。

(5) その後高山は、和田惟政が信長のもとに入ったとき、和田の臣下となった。

- ①1568年（永禄11）10月10日、義昭は信長の力で入市を果たした。
- ②そして、天皇から将軍に任じられた。
- ③和田はその功績によって山城、摂津両国の代官になり、芥川城を与えられ、その管理を高山に託した。
- ④和田は常にキリシタンの教えに好意的であった。
- ⑤宣教師と信長を結びつけたのは和田惟政であるが、その陰に高山ダリオがいた。

5. 信長の面前での宗論

- (1) 1569年（永禄12）4月20日、朝山日乗（日蓮宗の僧）とフロイスおよびロレンソの宗論。
 - ①京都妙覚寺において
 - ②日乗は信長と多くの家臣の前で、切支丹宗門布教の是非に関して討論した。
 - ③日乗は1時間半ほど教えについて質問したが、途中で激怒し、信長の刀を抜いてロレンソに切りかかり、人々から抱きとめられるという大失態を演じた。
 - ④その間、フロイスもロレンソもそこに座したままであった。

6. キリスト教と仏教の相違点

- (1) フランシスコ会士のマルセロ・リバデネイラは1600年代、こう書いている。
 - ①日本の仏教は日本に深く根をおろしているばかりか、組織もしっかりしている。
 - ②多くの分派があるが、その教義は実際的なひとつの点、すなわち「後生の救済」に絞られている。
 - ③日本では、「だれもが救いについて話し、また救いを探究する途上にある」。
 「一般人は、人びとを極楽につれていってくれる阿弥陀を信じなさいというたいへんわかりやすい慈悲深い阿弥陀に救いを見いだそうとした。また身分の高い人々は、釈迦の教えに帰依していた。それによれば、人びとは彼ら自身のなかであらゆる個人的欲望を消滅させるため、すべての煩惱を避けなければならず、そうすることで涅槃という永遠の休息の状態にたどりつく。その救いの理論は双方とも、業（カルマ）の理念—罪過の重荷は個人の色欲と行為をとおして過去の実在につながる—にもとづく。もしこの罪過の重荷が消滅しなければ、魂は動物や人間のなかで何度も飽くことなく生まれ変わり、さらに悲惨な生存をくり返すように運命づけられている」
- (2) この世で神の教えを守った者には、永遠の靈魂の生命が与えられるというキリスト教の死生観と、仏教のそれとは非常にちがうが、死後の救済を願う心は同じである。
 - ①後生の救いがこれほど切実であったのは、人生のはかなさの感覚を強くもっていたからである。
 - ②殺戮が日常茶飯事で、命が羽のように軽い時代であった。
 - ③生命が短いこと、この世の快楽や権勢のはかないことを強く感じていた。
 - ④それだけ宗教に来世の幸福と救いを強く求めていた。

- ⑤人々にとっては、どの宗派がその救いをいっそうたしかに約束してくれるかが重要であって、その点を比較しながら宗教を選んだのである。
- ⑥改宗させるにはこの点を納得させればよかった。

(3) キリスト教の死生観

- ①人間の靈魂は不滅で、動物などには生まれ変わらない。
- ②今のままの自分が身体を脱ぎ捨て、生きていたときの行いの結果によって救われる（あるいは救われない）。
- ③多くの僧侶や知識人が「理屈が通っている」といって改宗した。
- ④しかし、善行にはたくさんのカリキュラムがあって、それを行うのは容易なことではない。
- ⑤熱心な仏教徒は、実は熱心なキリスト教徒になる可能性が高い。
- ⑥この頃の日本人は、潜在的にキリスト教徒たりうる条件を備えていた。

7. 地動説について

(1) コペルニクスは 1543 年の没する直前、『天体の回転について』を刊行した。

- ①彼は、地動説の測定方法や計算方法をすべて記した。
- ②ローマ教皇庁は 1616 年に、コペルニクス説を禁ずる布告を出した。
- ③地動説を唱えたガリレイは、1616 年と 1633 年の 2 度、ローマの異端審問所に呼び出され、地動説を唱えないことを宣誓させられた。
- ④ローマ教皇庁ならびにカトリックが正式に天動説を放棄し、地動説を承認したのは、1992 年の事である。

(2) 1543 年（天文 12）は、種子島に鉄砲が来た年である。

- ①この時期の宣教師たちは、天動説から地動説へ、アリストテレスからガリレオ、ニュートンへと移行していくさなかの、いわば中世から近世への過渡期のさなかの知識を日本に持ってきたのである。
- ②彼らは、地球が球体であることは知っていた。地球儀の存在。
- ③彼らが持っていた宇宙論は、「アリストテレスの宇宙論」である。
「天体は球形で、なににも動かされず、自分で動く、つまり固有に運行する。万物を創造し、最初の動きを与えたものが、『神』であり、宇宙のすべての存在の原因である」

(3) 仏教的宇宙観

- ①古代インドの世界観では、中心にそびえる聖なる山を須弥山（しゅみせん）という（バラモン教、仏教、ジャイナ教、ヒンドゥー教）。
- ②風輪、水輪、金輪が重なっている。
- ③金輪の最上面が大地の底に接する部分を金輪際（こんりんざい）という。

- ④人間が住むのは、海水をたたえた金輪に浮かぶ閻浮提（えんぶだい）である。
- ⑤須弥山中腹に日天と月天が回っている。
- ⑥仏教的宇宙観は、宇宙の象徴的概念図である。哲学である。
- ⑦キリスト教的宇宙観は、目に見える現象を説明しようとする理屈、科学である。

II. 布教成功の理由

1. キリスト教の成功

- (1) キリスト教は、伝道後数十年にして信者が 30 万に達していたと言われる。
 - ①これは、世界宗教史上稀なことである。
 - ②貧民の救済事業を行ったことが大きく関係している。
- (2) 大名たちの事情
 - ①大名たちは戦争を繰り返しており、膨大な戦費を必要としていた。
 - ②ポルトガル人がマカオから大型船（ナウ船、定期船）で運んでくる商品との交易が莫大な利益をもたらした。
 - ③そこで、商人たちが尊敬していたパードレ（神父）たちを優遇した。
 - ④このことは、日本の領主とポルトガルの商人たちの共通の利益にもつながった。
- (3) 宣教師の役割
 - ①イエズス会宣教師は、最初からポルトガル商人和日本の領主や商人との仲介者として重要な役割を果たしていた。
 - * 豊後（大分）の大友氏
 - * 島原（長崎）の有馬氏
 - * 肥前（佐賀）の大村氏
 - ②彼らは、自分の領土の港にナウ船に来てもらいたがった。
 - ③宣教師も、利益をちらつかせて布教した。
 - ④また、宣教師自体も布教のために金を必要としたので、交易に関わった。
- (4) ヴァリニャーノの観察
 - ①後に、巡察師のヴァリニャーノは九州を視察した。
 - ②それから都に上り、そこでのキリシタン大名たちが「ナウ船」との交易の利得なしに、「純粹に」キリスト教に帰依したことを高く評価した。

「交易から受ける儲けがまったくない京都地方では、今までに改宗した殿たちは、まずわれわれの教義を聴いてそれを正しいとおもったがゆえにそうしたのです」

「日本人は、たいていの場合、個人的な動機から改宗するのではなく（君主の利益を考えてそうす

るので、自分の利益ではないですから)、ただ彼らの君主が命令するからなのです。しかし、日本人は『白人』であって、すぐれた理解力とよいふるまいかたを知っていて、また大いに世間体も気にして教会にも熱心に通い、説教を聴きますので、教育を受けたときには非常にすぐれたキリスト教徒になるのです」

2. 日本人女性入信の理由

(1) 女性信者の心をつかんだ。

- ① 仏教の女性蔑視。「女性は本来不浄であるので、忌み嫌うべきであり、浄土に入ることは許されない」
- ② ザビエルと同じく、ヴァリニャーノも仏教の女性蔑視を攻撃した。
- ③ キリスト教では、神の前では被造物はみな同じである。
- ④ 知識人は宇宙論で入信し、貧しい者は慈善で入信し、女性は女性の理由で入信した。

(2) 一夫一婦の教え

- ① この教えは、日本の実情にも性的習慣にも合わなかった。
- ② 当時の日本の一夫多妻の習慣や心の在り方に衝撃を与えた。
- ③ 儒教には「貞女二夫にまみえず」という教えがあるので、妻の貞節はいつでも要求された。
- ④ この教えは当時の女性たちに歓迎された。

(3) 信長の長男信忠

「もし伴天連が十戒の中の掟『汝、姦淫するなかれ』に対して便宜をはかり（ゆるやかにし）、それほどまでに厳格に考えることをやめるならば、キリシタン数は疑いなく倍加するであろう」

(4) 秀吉がフロイスに向かって言った冗談

「もし伴天連らが予に多くの女を持つことを許すならば、予はキリシタンになるであろう」

3. 上流階級と下層階級

(1) 仏教や神道は、政治や経済や権力としっかりと結びついていた。

- ① この構造から益を得ている支配階級の人にとっては、新しい宗教に走ることは、自分の身分や地位、そして経済的基盤や支配の形式さえも破壊の危機にさらうことになる。
- ② 支配階級の者は、仮にその宗教がよいと思っても、なかなか入信できない。

(2) 圧倒的多数の貧困な人びとは、この世においてこれ以上失うものはなにもない。

- ① 貧乏や戦乱が永久に続く時代である。
- ② 貧乏人の心を慰め、神の国での平等な幸福を約束してくれる新しい宗教を信じる自由がある。

- ③さらに、若者たちは、キリスト教の教えだけでなく、その背後にある西洋に憧れ、そこへ行きたいと願った。

§6 キリシタンと武士道

Ⅰ. キリシタン大名

1. キリシタンの世代

(1) 第一世代

- ①大村純忠（肥前）、大友宗麟（豊後）、有馬晴信（肥前）などのキリシタン大名。
- ②仏教からキリシタン教に改宗した世代である。

(2) 第二世代

- ①その息子たち。1550 年以降に生まれた。
- ②右近ジェスト（キリシタン武将の鑑といわれた）
- ③大村純忠の息子喜前（よしあき）（背教の見本と言われた）
- ④堺の豪商の息子小西行長アゴスティーノ
- ⑤黒田如水シメオン
- ⑥1570 年代生まれの遣欧少年使節たち
- ⑦彼らは、最初からキリシタンとして育った。
- ⑧生涯の半ばで、「死」か「日本永久追放」か「棄教」かの選択を迫られた世代。

(3) 第三世代

- ①隠れキリシタン
- ②彼らはみな百姓であった。
- ③農民はどこにも行けなかったし、行かなかったのである。

2. 武士道

(1) 武士道と言われるものは、人を死にやすくする教えである。

- ①中世において「弓矢の道」と言われた。
- ②主君のためには死を恐れぬ勇気を持つという武士の教えであって、まさしく戦国武士に求められたものである。
- ③「死を軽んじて名を重んずるを以て義とせり」（太平記）

(2) 「武士道」という言葉も、思想としての内容も、明確な形で登場してくるのは、徳川時代になってからである。

- ①中世社会で「弓矢取る身の習い」とか「弓矢の道」と称せられていたものは、戦国時代を

経て近世に入ると、「武士道」という新しい表現を取るようになった。

- ②それは、17 世紀前半のあたりのことである。
- ③徳川時代は武士が支配する時代であるが、実に 200 年以上にわたって内戦のない平和な状態が続いた。
- ④「武士道」の内容は変質し、支配者や役人としてふさわしいような徳義が強調されるようになった。

(3) 近世になると、儒教的な道徳を教えることが優先された。

- ①山鹿素行（1622～85）は、直接生産に従事していない武士の職務は、人倫を重んじ、模範的に行動し、これによって主君に仕えるものとした。
- ②1716 年（享保元年）『葉隠』（佐賀藩）
「武士道とは死ぬこととみつけたり」という極端な思想に凝縮された。
*近現代の戦争時にも、この思想は有効に作用して若者に死ぬことを教えた。

(4) 明治時代になると、儒教的な訓練を受けた武士出身の青年たちが、西洋文明の根底をなす道徳（ピュリタニズム）にふれて、キリスト教の伝道師となっていた（プロテスタント）。

- ①当時の代表的キリスト者である新渡戸稲造は、『武士道』（明治 30 年）を書いた。
*日本には宗教教育がない。では、どのようにして道徳教育を行うのか。
*武士道は過渡的日本の指導原理であり、かつ、新日本の形成力であるとの主張。
- ②植村正久は『武士気質』（明治 33 年）で、「キリスト世の罪のために己れを捨てたるのとき、武士風の教育を受けたる人の心には了解さるることは容易にして」と述べている。

(5) 伝統的な武士道はその時代とその状況によって変化し、さまざまな要素と合体し、多様なかたちで現れる。

- ①戦国時代には、死を美化する戦国の心の在り方が、教会と信仰を守る場を死に場所であると武士に教えた。
- ②凄惨な貧困の中にある者は、死ぬことによって至福の天国に入る望みを得た。
- ③女たちは、夫や息子とともに死ぬことを選んだ。

(6) なぜ殉教者が多く出たのか。

- ①関根文之助氏の「武士道とキリシタン」という論文（1960 年）
*徳川時代に大量の殉教者が出た理由は何か。
*殉教者が武士階級に多かった理由は何か。
- ②武士道とは主君のために命を棄てることであって、これらの武士は徳川幕府にではなく、キリスト教の神に武士道をもって殉死した。
- ③そうでないと、家光が 12 年間に 28 万人のキリスト教徒を殺害できた理由がよく分からない。

Ⅱ. 教理内容 「どちりな きりしたん」(キリスト教教義)

- (1) ポルトガル語で「キリスト教の教義」という意味
 - ①禁教以前に印刷されていたキリスト教の教義書
 - ②対話形式の平易な文章で書かれたキリシタンの教義理解の手引き書
 - ③ヴァリニャーノがヨーロッパから持ち込んだ活字印刷機により他の数々の書物と共に印刷された。
- (2) 4種類ある。
 - ①刊行年・刊行地共に不明の国字本
 - ②文禄1年(1592年)発行の天草版ローマ字本
 - ③慶長5年(1600年)発行の長崎版ローマ字本
 - ④同年発行の長崎版国字本
- (3) ローマ字本と国字本
 - ①ローマ字本は、ヨーロッパ人の日本語学習のため
 - ②国字本は日本人信徒の教理学習のため
- (4) キリスト教が来世における救済の教えであることを、繰り返し強調している。

序文

- (1) キリスト教が来世における救済の教えであることが強調されている。
 - ①「後生たすかるまことのみちをひろめよ」(ゼス・キリシトのことば)
- (2) 三の儀にきわまる也。
 - ①ヒイデス(信仰)
 - *信ずべき内容、人知を超えたもの。
 - *これを知らなければ、「ごしょうの道にまよう事おほかるべし」。
 - ②エスペランサ(希望)
 - *デウスより与えられた「ごしょうにあたるほどの事」。
 - *これがなければ、試練に会ったときに「ちからをおとす事もあるべし」。
 - *アニマ(靈魂)の大きなさわり也。
 - ③カリダテ(愛の徳、慈悲)
 - *つとめをこなうべき事。
- (3) これらの儀をこゝろえざれば、デウスの御をきてをたびたびそむく事あるべし。

- ①ちなみに、デウスの十戒の第4の掟で、「父母に対する孝行」を「主人・司たる人（主君や領主）に対する忠誠と服従」と敷衍して規定している。

1. キリシタンといふは何事ぞといふ事

(1) 神論

- ①天地創造の神は、唯一デウスだけである。
- ②デウスは、私たちの行いに応じて報いをされる。
*この方を礼拝し尊ばなければ、ごせ（後世）の助けを受けることはできない。
- ③デウスは三位一体である。
*パアテレ
*ヒイリヨ
*スピリツ
「ペルサウナは三つにてましまして、ス、タンシャと申す御しょうたい（正体）は、たゞ御一たいにてまします也」
- ④「D ヒイリヨーさいにんげんのとがを送り玉ひ、後生をたすかるの道ををしへたまわんためにあまくだり玉ひ、ウマニダデ（人性のこと）とて、われらとひとしきアニマしきしん（色身、物質的肉体のこと）を御身にうけあわせ玉ひ、ふうふのまじわりなくたつときビルゼン マリヤよりまことの人とうまれ玉ひ、つみにクルスにかけられ、人にてまします御ところはしゝ玉ふ事」
*御子の処女降誕
*御子の2性
*人間の咎を取り去るための十字架の死
*死後助かるための道を教えた。
- ⑤「ごしょうのみちはキリシタンのをしえへにのみきわまるなり。それによてキリシタンにならずんばごしょうをたすかる事あるべからずとふんべついたす事これなり」

(2) 人間論

- ①人間は肉体とアニマ（滅びることのない靈魂）を持っている。
- ②アニマは肉体にいのちを与え、肉体が土に帰っても生き続ける。
- ③アニマは、善悪にしたがって後生のくらくにあづかるもの也。

(3) 救済論

- ①デウスのガラサをもてキリシタンになる者也。
「デウスのガラサをもてとは、ちゝはゝ、御さくのものゝ力にあらず、只デウスの御じひのうえより御あるじデス・キリシトの御くりき（功力）をもてキリシタンになる事也」
- ②キリシタンになると与えられる特権

「デウスの御やうし(養子) 天の御ゆづりをうけ奉る身となる也。そのゆへはパウチズモの御さづけをうくる人々を此くらゐにあげたまわんとおぼしめすにてなり」

③キリシタンでない人はどうなるか。

「パウチズモをさづからざるにて、御養子となしたまわず、天の御譲(ゆづり)をうけまじき者也」

④キリシタンとはどういう人か。

「もろもろのキリシタン御あるじゼス・キリストの貴き御事を心よりヒイデスにうけずしてかなわぬのみならず、かんようなる時はしするといふとも、ことばにも、身もちにもあらわすべきとかくごある事もつばらなり」

2. キリシタンのしるしとなる貴きクルスの事

(1) クルスがキリシタンのしるしである理由

①「われらが御あるじゼス・キリシト、クルスのうえにて我等を自由になしたまへば也」

(2) 自由になし玉ふとはなに事ぞや。

①「てんぐのとらわれ人となりたる我等が普代の所をのがし玉ふにて也」

②人は自分の科と悪魔の奴隷である。

③イエスのことばに、科を犯す者は悪魔の奴隷であるとある。

④人が「モルタルとが」を犯せば、悪魔はその人を思い通りにするので、人は悪魔の奴隷となった。

⑤「しかればクルスにかゝり玉ふみちをもてさだめ玉ふパウチズモのさづけをうけ、又コンヒサンのサカラメント(ゆるしの秘跡)をうけ奉れば御あるじゼス・キリシトあたへ玉ふガラサをもてその人のもろもろのとがをゆるし玉ふにて、クルスの御くりき(功力)をもて御あるじゼス・キリシトてんまのやつことなりたるところをうけかへし玉ふと申なり」

⑥私たちを自由にしてくださった方の恩は実に深い。

(3) クルスのもん(文)は、2種類ある。

①右の親指を額、口、胸につけ、「われらがDサンタクルスの御しるしを以て、われらがてきを、のがしたまへ」と祈る。

②右手を、額・胸・左肩・右肩の順に動かす(正教会と左右逆)し、三位一体の神を覚え、「父と子と聖霊の御名によって」と唱える。

(4) どのような時にクルスのもんを唱えるか。

①事を始めるとき、寝たり起きたりするとき、教会へ入るとき、食事のはじめ、苦難に会うとき。

②たびたび唱える理由は、神が敵の手からわれらを逃してくださるため。

(5) われらの敵とは

- ①せけんと、てんぐと、しきしん（色身）これなり。
- ②しきしんとは、アダンよりうけつゞくはじめのとが（原罪）によって、悪きうまれつきの色身をいふ也。

3. パアテル ノステルの事

(1) 「ラウマのサンタ エケレジャよりをしへ玉ふオラショををしうべし。つぎに又しんじ奉るべきでうゞと、つとむべきぎょうぎをもあらわすべき也」

- ①パアテル ノステル（主の祈り）
- ②アベ マリア
- ③サルベ レジナ（この言葉で始まる祈り）
- ④ケレド（使徒信条）
- ⑤十かでのマンダメント（十戒）
- ⑥サンタ エケレジャのマンダメント

(2) 分別のつく年頃のキリシタンが知るべきことは何か。

- ①デウスをよくたのみ奉り（信仰）。
- ②よくしんじ奉り（希望）。
- ③よきしよさをなすみちをしる事これなり（愛の徳、慈悲）。

(3) それらを知る道とは。

- ①については、「パアテル ノステルのオラショをもてしるべし」。
- ②については、「ケレドあるひはヒイデスのアルチゴ（信仰の箇条）をしる事也」。
- ③については、マンダメント、教会のマンダメントを知り、悪を退けるためには7つの「モルタルとが（死に至る罪）」を知ることなり。

(4) 信仰のために、パアテル オラショを知る必要がある。

- ①ここで、主の祈りの文言をそのまま教えている。
- ②「てんにまします我等が御親」という呼びかけの解説
- ③7ヶ条の祈りの内容の解説
- ④これにまさりたるオラショべつになし。

4. アベ マリヤの事

(1) デウス以外にも祈りを捧げる対象がいる。

- ①てんにましますもろゝのぜんにん

②あくにんのためになかだちとなり玉ふ御はゝビルゼン サンタ マリヤ

(2) アベ マリヤというオラショ

- ①聖母マリアへの祈祷のこと。
- ②聖礼典ではなく、私的な祈りとして捧げられるもの。
- ③祈りの内容は、ルカ 1：42 のエリサベツの言葉で始まり、後半が付加されたもの。
- ④この祈りを繰り返し唱えるのが、「ロザリオの祈り」である。
- ⑤詩篇 150 篇の代わりに、聖母マリアへの祈り（主の祈りも含む）を 150 回唱える。

5. 「どちりな きりしたん」雑感

- (1) 当然のことながら、この時代に日本に伝えられたのは、カトリックのキリスト教である。
- (2) 「どちりな きりしたん」には、カトリック教会の口伝律法が満載されている。
 - ①福音+業
 - ②当時のクリシタンたちは、救われていたのか。

第1回セミナーのまとめ

日本でキリスト教が敗北した原因は、何か。

その原因は、神仏信仰と拮抗したからではなく、封建社会の道德（主従関係を基にした固定的社会制度）がこれによって破壊される危険があったからである。主君の命令には絶対服従するというのが、臣道であり、封建社会の道德である。主君の命令よりも神に従うことを大事にする信仰は、封建社会の秩序への反抗である。

ただし、上記のことは主君の命令が神の命令に反する場合のことである。主君の命令が神の命令に反しない場合は、クリシタンの武士たちは、主君を裏切らず、主君に忠誠を誓うという道德を持っていた。

以上のことから、武士道とキリスト教信仰とは、両立する場合と、そうでない場合とがあることが分かる。

第2回セミナーにおいては、禁教令の背景と展開について学ぶ予定である。

参考文献

- * 「どちな きりしたん」－長崎版－。岩波文庫（1950 年）。
- * 「フロイス日本史」中公文庫（全 12 巻）
- * 「千利休の妻たち（上）（下）」三浦綾子著。新潮文庫（1988 年）。
- * 「ザビエルの見た日本」ピーター・ミルワード著。講談社学芸文庫（1998 年）
- * 「ザビエル」小原悟著。Century Books—人と思想（1998 年）。
- * 「クワトロ・ラガッツィー天正少年使節と世界帝国」若桑みどり（2003 年）。
- * 「フロイスの見た戦国日本」川崎桃太著。中公文庫（2006 年）
- * 「日本キリスト教史」中村敏著。いのちのことば社（2009 年）
- * 「利休にたずねよ」山本兼一著。PHP 文芸文庫（2010 年）

MEMO

第1回 クリスチャン・リーダーシップセミナー

中川健一「日本人の精神構造を探る（1）」

— 戦国時代の日本とキリスト教の出会い —

1 日目

時間	セミナー内容
10：00 ～ 11：00	§ 1 西欧世界と日本の出会い
11：00 ～ 12：00	§ 2 フランシスコ・ザビエル
12：00 ～ 13：00	§ 3 ザビエル以降

2 日目

時間	セミナー内容
14：00 ～ 15：00	§ 4 織田信長と宣教師たち
15：00 ～ 16：00	§ 5 キリスト教と仏教
16：00 ～ 17：00	§ 6 キリスト教と武士道

名前： _____